

アフリカの哲学であるウブントゥと、日本での「人」という漢字のなりたちまつわる美しい誤解。この二つの遠い文化はどちらも、社会がひとに人間性を与えると考える。この考えを具体化し、人間性を実践するとしたらどうなるだろう？ 二人一組でお互いに寄りかかりながら座り、立ち上がる簡単な運動。参加者のあいだには、葛藤や新しい解釈、感情的な交流の瞬間が生まれた。



Graphic Movements 文字の動き

2019年-

ワークショップ+インスタレーション（絵画収蔵用可動式スチールメッシュラック、木綿布、プロジェクター）

投影面：255x158 cm

バッグ・ファクトリー（ヨハネスブルク）でのプロジェクト『追熟と訛り：文字の動きと言葉の行為』の一部として

アパルトヘイト撤廃、民主化から25周年を祝う南アフリカ。未だ人種差別が根強く残り、外国人排斥の暴動が勃発する。そんなヨハネスブルクでの日常の中で経験した、人間の属性から生じる分裂（二分）と親近から着想を得て、言語と文化の翻訳にまつわるプロジェクトの試行を重ねた。

「ウブントゥ」という世界観に出会い、それを「人」という漢字のかたちと結びつけ、二人の人間が互いに支え、寄りかかり合いながら背中合わせに座って立つというワークショップのシリーズを展開。そこでは、先のワークショップの記録を次に行なわれるワークショップの背景として用いた。

接触と即興 - 異なる文化の世界観の出会うところ

ヨハネスブルクでの社会と文化の観察、そしてその反芻は、バントゥー諸語を話す地元の人々との対話を通して深く育っていった。その中で、ひとは他者を通して存在するというアフリカの哲学、「ウブントゥ」という言葉が顕在化。他者との関係性の中で自己を捉えるという視点は、二つの傾いた線が互いにもたれ合う象形文字で人間を指す、「人」という漢字と物理的にも概念的にも響き合う。

南アフリカ訪問前に滞在していたウィーンで試した、他者との関係性の中で自身の身体を探求するダンス、コンタクト・インプロヴィゼーション。その基本動作で、二人一組となって手を使わずに座って立ちあがるという動きに、ふたつの世界観を体現するかたちを見出した。

人間性を実践する

簡単な身体の動きを通して「人」の字を書くというワークショップを、家族や学校、職場といった、さまざまなかたちの社会を舞台に行なった。表語文字としての漢字の紹介に始まる。参加者は二人一組となり、背中合わせにコミュニケーションをとり、手を用いずに一緒に座って立ち上がる - この目標を達成するため、信頼しあい、均衡とシナジーを見つけていく。多くの成功例の一方で、うまくいかなかったさまざまな奮闘と試み、誤解、新たな解釈もあった。そして二人の間、ワークショップに居合わせた人々の間で、数々の感情のこもった触れ合いと表現の瞬間があった。

白でも黒でもない、「灰色」への還元

先に行ったワークショップの過程を捉えた映像の抜粋を、絵画収蔵に用いる格子状の金属性構造物に布を掛けて投影するインスタレーション。これを背景として、三回目のワークショップを行った。以前の試みの成功と失敗から学ぶべく、参加者は映像を参照しながら動作を実践した。この動作をプロジェクターと投射面の間で行なうことで、人種や性別等に関わらず参加者はみな、映像の中に落とされる、灰色の影に還元されることになった。

異文化からの「継承」の問い

文化の盗用は南アフリカの人々との対話の中で繰返し浮上する問題で、大いなる思索と討論の機会をもたらしていた。そこでワークショップの始まりには、日本語では4世紀から中国の文字（漢字）を用いていること、今回行った動作はコンタクト・インプロから引用したもので、そのダンスは日本の近代武術である合気道に着想を得て1970年代初めにニューヨークで発展したことも伝え、文化の「所有」や「継承」の概念についても問うた。



(左頁) セント ジェームス校でのワークショップ風景
(右頁上から) 身体運動の前に象形文字としての漢字を紹介
／ 多人数家庭で兄妹とのワークショップ風景
／ 展示での観客と同僚とのワークショップ風景
／ バッグ ファクトリーでのインスタレーション風景

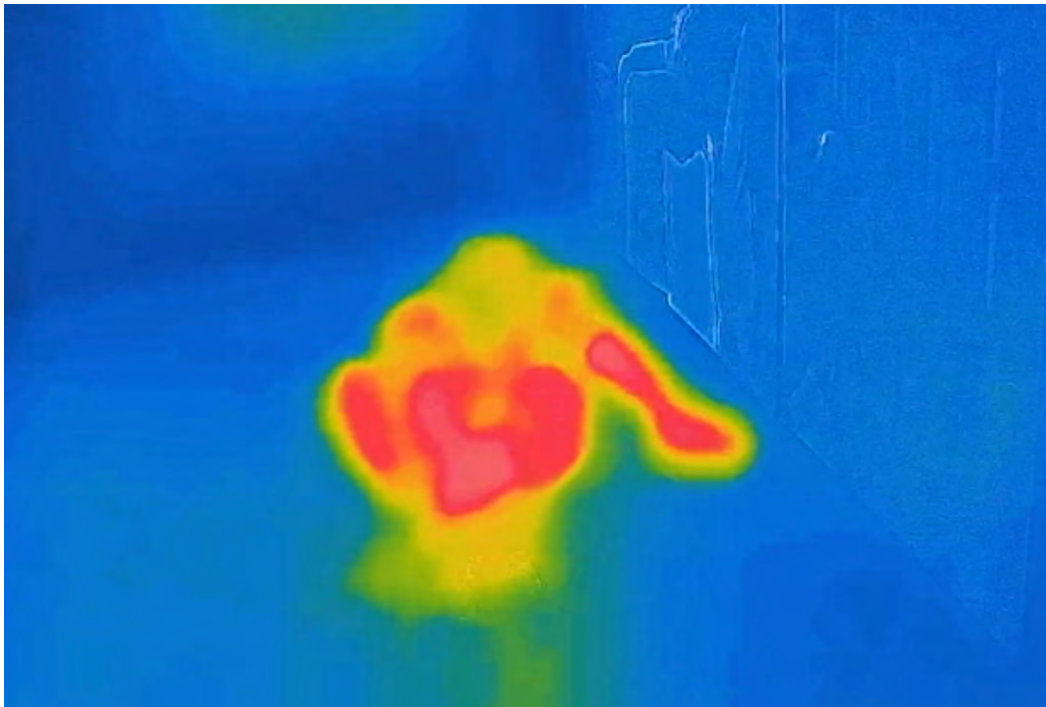




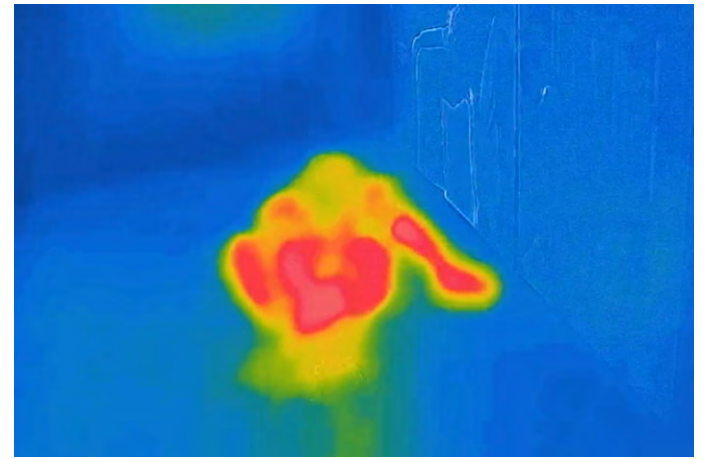
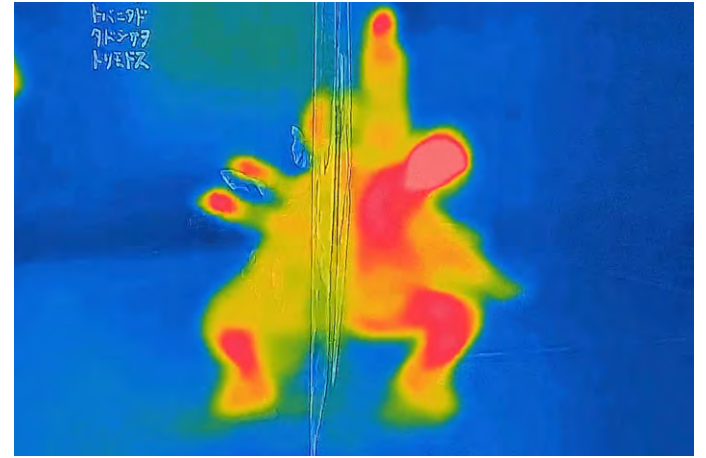
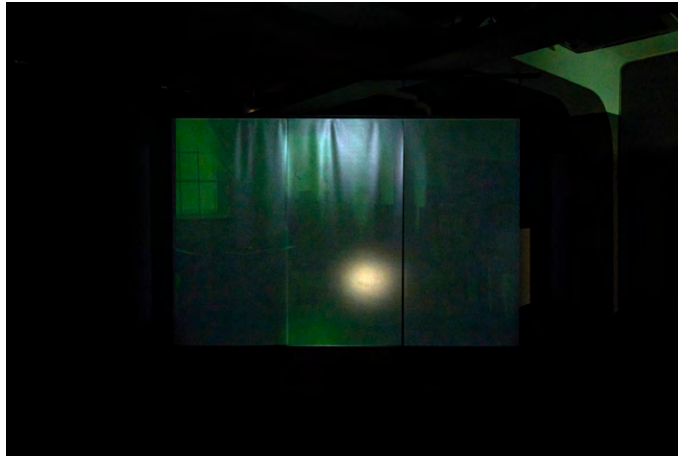
『文字の動き』の南アフリカでのワークショップ風景 異人種間家庭の家でその兄妹たちと / 多様性を包括する哲学のある小学校の生徒たちと / 芸術文化機関で同僚や一般の観客と



『文字の動き』 ワークショップ風景 スtockホルムのNKFでの展示では観客が自発的にワークショップを開始 (左上) ジンバブエの国立美術館でスタッフ (右上) 一般の人々と (左下)、地元の男子校で実行 (右下)



『文字の動き』ワークショップ風景 帝京大学での複数人での挑戦(上) TOKAS本郷での独りでの挑戦のサーモカメラによる記録(左下) イタリア・チッタデラルテでは、試行後にあちこちで自然とハグが発生(右下)



『文字の動き』 コロナ禍のTOKAS本郷（東京）でのグループ展でのインスタレーション、ワークショップ風景。投影面が空間を二分。ワークショップでは記録にサーマルカメラも使用。参加者が一人で立ち上がる新たな試みも。